

湯築城だより 8

YUZUKIJO-NEWS Vol.8

特集！河野通信－源平の争乱を生きぬいた武者－

●河野通清・通信の登場と源平の争乱●●●●●●●●●●

平安時代末期に起こった保元の乱(1156年)・平治の乱(1159年)では、皇位継承問題に端を発した政治闘争が武力によって解決され、武家が政治の場に台頭するようになりました。平治の乱で源氏を破った平氏は急速に力をつけ、平清盛が太政大臣の地位についたのをはじめ、平氏一族が高位高官の多数を占め、特に西国に勢力を大きく伸ばしました。一方、敗れた源氏は、東国で源頼朝が、治承4(1180)年8月、伊豆で平氏打倒の兵を挙げました。

源氏一族や東国の武士が挙兵する中、源氏と特別なつながりを持たず、平氏の影響力の強い西国にあっていち早く源氏方として挙兵したのが伊予国の河野氏でした。

頼朝の挙兵から半年後、治承5(1181)年閏2月、伊予国の河野通清が挙兵したとの報せが鎌倉に届きます(『吾妻鏡』)。しかし、同年8月には早くも通清の戦死が都に伝えられています(『吉記』)。通清の死の直後、後を継いだ息子の通信も阿波の平家方家人に攻められ、苦戦しました(『吾妻鏡』)が、源氏の攻勢とともに勢力を盛り返します。元暦2(1185)年1月には平家方の高市氏を攻め(『予章記』)、同年2月の屋島の合戦では、通信が兵船30艘を率いて義経軍に加勢しました(『吾妻鏡』)。同年3月、源氏と平氏の決戦となった壇ノ浦合戦にも参戦したことが『平家物語』で知られ、海戦を得意とする通信は河野氏ゆかりの水軍を率いて活躍しました。



河野通信奉納と伝わる甲冑

【国宝 紺絲威鎧・兜・大袖付 大山祇神社蔵】

【通信関連年表】

1180	治承4	4月	以仁王、平氏追討の令旨を出す
		8月	源頼朝が伊豆で挙兵
1181	治承5	閏2月	河野通清が平氏に背いて挙兵したという報せが鎌倉に伝わる 『吾妻鏡』
1181	養和元	8月	河野通清の戦死が京に伝えられる 『吉記』
		9月	阿波の平家方有力家人、民部大夫成良が伊予国に乱入、通信敗れる 『吾妻鏡』
1184	寿永3	2月	源義経・範頼軍が一ノ谷で平氏を破る
1185	元暦2	1月	通信、平氏方の高市源太秀則と戦う、図書充俊則と鷺小山で戦い、勝利 『予章記』
		2月	義経、屋島の合戦で平氏を破る
			通信、30艘の兵船を率いて、屋島の義経軍に合流する 『吾妻鏡』
		3月	壇ノ浦の合戦 平氏軍壊滅、安德天皇没す
			通信、150艘の大船を率いて源氏方として参戦する 『平家物語』
1189	文治5	7月	通信、頼朝の奥州合戦に従軍する 『吾妻鏡』
1192	建久3	7月	頼朝、征夷大將軍となる
1203	建仁3	4月	通信に守護の沙汰を受けず、国中の近親・郎党を統率することを認める 『吾妻鏡』
1215	建保3	2月	通信から一族の池内公通に所領が譲られる 『池内文書』
1221	承久3	4月	通信、後鳥羽上皇が城南寺の仏事に際して軍勢を招集するのに応じる 『承久記』
		6月	通信と子息太郎が広瀬(山城国)に出陣する 『承久記』
			伊予国で鎌倉御家人と合戦におよぶ 『吾妻鏡』
			通信、承久の乱に敗れ、奥州平泉に配流される 『予陽河野家譜』
1223	貞応2	5月	通信没 『予章記』 『予陽河野家譜』
1280	弘安3		通信の孫一遍が通信の墓を訪ねる 『一遍上人絵伝』

●承久の乱と河野氏の没落●●●●●

源頼朝は、建久3(1192)年、征夷大將軍となり鎌倉に幕府を開きます。河野氏は源平の争乱時の功績によって、西国では異例の御家人となりました。

西国御家人の幕府内での地位は、東国御家人に比べて、いちじるしく低かったといわれますが、通信は、文治5(1189)年、将軍頼朝に従って奥州合戦に出向き、また、鎌倉の浜に屋敷を構えるなど(『吾妻鏡』)、鎌倉幕府で好待遇を受けた数少ない西国武士でした。

建仁3(1203)年、通信は伊予に帰国しましたが、当時の伊予国守護であった佐々木氏の許可を受けず、今まで通り国中の近親や郎党を統率してもよいと認められるほど、力をつけていました。(『吾妻鏡』)

しかし、承久3(1221)年、後鳥羽上皇らが鎌倉幕府打倒の兵を挙げ、幕府に鎮圧されるといった事件「承久の乱」が起こります。この事件で、通信ら河野氏の大半が後鳥羽上皇方として戦ったため、通信は奥州平泉ひらいずみに配流され、貞応2(1223)年没したと伝えられます(『予陽河野家譜』)。通信の墓は、岩手県北上市きたかみに現存しており、『一遍上人絵伝』には、祖父通信の墓を訪ねる一遍いっぺんの姿が描かれています。

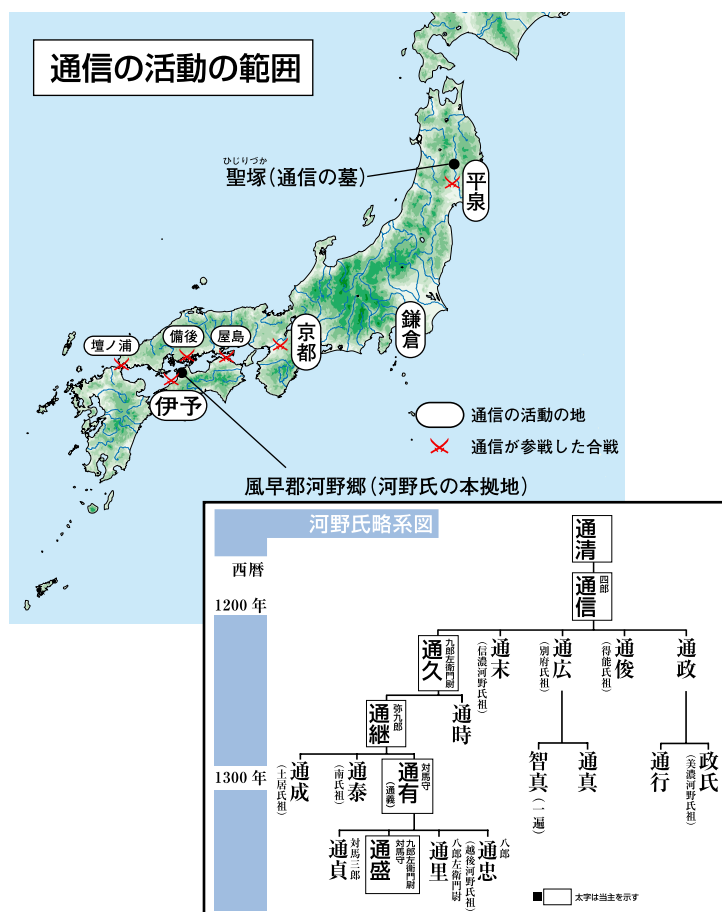


河野通信の墓に詣でる一遍



河野通信の墓に詣でる一遍
【『一遍上人絵伝』第5巻第3段 清浄光寺蔵】

●通信の活躍の軌跡とその後の河野氏●●●●●



源平の争乱から鎌倉幕府の成立、そして承久の乱まで、河野通信は、まさに波乱の時代に一族の武士団と水軍を率いて、瀬戸内海から鎌倉、そして奥州平泉まで広範囲に活躍しました。通信は、一国の有力武士から西国御家人となって勢力を伸ばし、後の河野氏発展の基礎を築きました。

承久の乱で通信が反幕府方となったため、河野氏の勢力は一時衰退しましたが、通信の息子通久みちひさが一族のうち一人幕府方についていたので河野氏の系譜は途絶えることなく、その後、鎌倉時代末期に元寇で活躍した通有みちありや、南北朝期に活躍し伊予国守護となった通盛みちもりが登場したのです。

●河野氏の本拠地—風早郡河野郷—●●●●●●●●



風早郡河野郷



善応寺

河野氏の本拠地は、風早郡河野郷（松山市善応寺^{ぜんのうじ} 一帯）です。

善応寺周辺は「河野郷土居^{どい}」とよばれ、一族の本拠地を松山平野の湯築城に移す以前の河野氏の居館があったといわれます。南北朝期にかけて活躍した河野通盛^{みちもり}が、14世紀前半～中頃に土居館を改修して善応寺を建立し、また湯築城を築城したとも伝えられています。

河野氏が館を構えた「河野郷土居」周辺は、前方に北条平野が開け、斎灘^{いつきなだ}を見渡す位置にあります。また、背後の三方を高縄山^{たかなわさん}から延びる山並みに囲まれており、雄甲山・雌甲山・高穴山は背後の高縄山とともに天然の要塞^{ようさい}の役割を果たしました。

大相院遺跡の調査

大相院遺跡の調査

大相院遺跡は、松山市善応寺字大相院に所在します。道路建設に伴う発掘調査の結果、土地を区画する素掘り溝^{みぞ}や溝にともなう石組み遺構^{いこう}と、溝に捨てられた大量の土師質土器の杯や皿^{はじしつどき}が見つかりました。14世紀代に区画溝に大量の土師質土器を捨てた儀式などの行事が行われたと考えられます。溝からは、それより古い輸入陶磁器^{ゆにゅうとうじ}（白磁四耳壺^{はくじしじこ}・青磁水注^{すいぢゆう}）も見つかっており、14世紀以前から輸入品を入手する有力層がいたことを想像できます。区画溝の内側には柱穴も確認され、掘立柱建物^{ちゆうけつ}など建物があった可能性も考えられます。

大相院という地名は、善応寺^{ぜんのうじ}に付随して建てられた院^{いん}に由来し、大相院遺跡は当時の善応寺境内の一面であったと考えられます。溝に土器が捨てられた行為などは、善応寺創建^{そうけん}にともなう土地の再開発が行われる過程を示しているのかもしれませんが。

また、13世紀代の墓には、硯^{すずり}・短刀^{たんとう}・龍泉窯系劃^{りゅうせんようけいかつ}花文青磁碗^{かもんわん}が副葬^{ふくそう}されていました。遺骨はなく、埋葬された人物の性別や年齢はわかりませんが、当地域で活動をした識字階級の有力人物の墓と考えられます。墓の時期は河野通信の活躍していた時代と重なり、その時期から河野氏の本拠地で活動した有力層がいたことがわかります。



区画溝と石組み



墓に副葬された硯・短刀・青磁碗

●出土遺物 ミニギャラリー●●●●●●●●●●

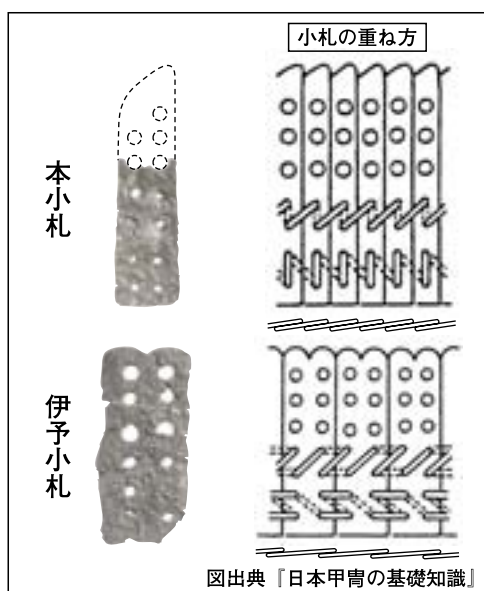
いよこざね 伊予小札

武士が身を守るために身につけたのが、甲冑（「よろい」と「かぶと」）です。平安時代中期には、弓矢を用いる騎馬戦に適した大鎧が完成したといわれ、その後、鎌倉時代には徒歩用で防御率が高く足さばきの良い胴丸、戦国時代には胴や兜の他に小具足がそろった当世具足がよく用いられました。

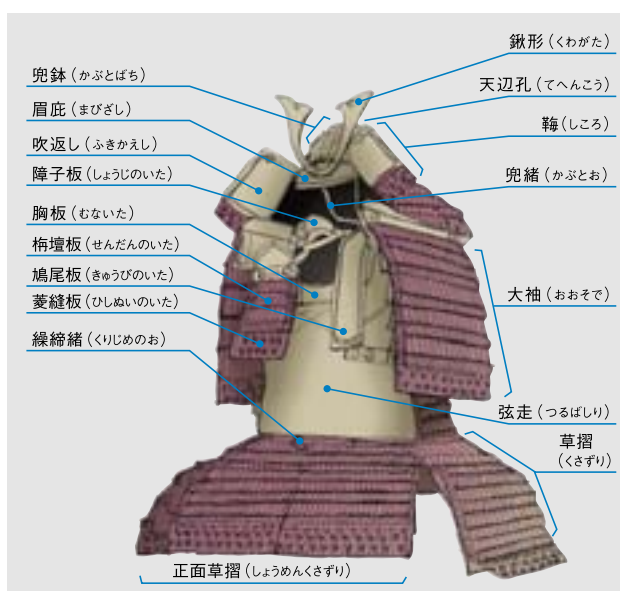
鎧は、小札を重ねて糸でつづって（威し）て作られます。小札とは、薄い鉄板でできた甲冑を形成する根本的な材料です。一領の甲冑に2000枚以上使用され、そのため、全体の重量は20キロ以上にもおよぶといわれます。威しの糸の色を鎧の形式の前につけてよばれることが多く、河野通信奉納と伝わる甲冑（巻頭写真参照）は、紺糸で威した大鎧という意です。

小札の種類の中には、伊予小札とよばれるものがあります。名称からわかるように、その発祥地は伊予の国とされ、伊予に地方甲冑師がいたことをしめしています。伊予小札の特徴は、幅広であることと、頭部の形（碁石頭）と糸をつづる穴の個数にあります。一般的な本小札とよばれる小札は、隣の小札と半分ずつ重ねてつづられますが、伊予小札は、本小札2枚分を一枚で代用した簡略形とされ、隣の小札と端だけをわずかに重ねてつづられます。穴の個数は、頭部が斜めに落とされている本小札では左右列の数が異なるのに対して、伊予小札は左右同じ数あけられます。

湯築城跡でも、本小札と伊予小札が出土しています。バラバラで出土しており、甲冑の個体を形成する程の量は残存していません。甲冑を始め武器や武具類は廃城後、外に持ち出されたものが多かったと思われます。しかしながら、城に残されたこれらの出土遺物からは、湯築城が存在した時代、甲冑を身につけた武士たちが城内を行き交っていた姿が想像できます。



湯築城跡出土の小札



大鎧の各部名称

●中世を知ろう!

河野通信活躍の記録と人物像

源平の争乱における通信の活躍は、鎌倉幕府の歴史書『吾妻鏡』や河野氏の家譜『予章記』のほか、『平家物語』にも記されています。『平家物語』は誇張や脚色が多い軍記物語であり、内容のすべてを信じることは出来ませんが、物語の中では、通信の活躍の様子が生き生きと描かれ、武者通信の人物像をうかがうことができます。

『平家物語』に記された河野通信

平教経が四国に攻めてきた際、通信は、安芸の沼田氏が母方の叔父であるので備後に渡りともに戦います。沼田氏は敗れて捕らえられますが、通信は最後まで抵抗し、「伊予国の住人、河野四郎越智通信、生年廿一、」と大声で名乗りをあげ、手負いの郎党を助けて伊予に逃げ帰りました。（【史料一】巻第九 六箇度合戦の事）

また、壇ノ浦の戦いでは、通信が大船150艘を引き連れて源氏方に加勢します。それを見た平氏が「いとど興ざめてぞ思われける」と戦意を喪失する程に、河野氏の水軍は強大であったようです。

【史料一】『平家物語』巻第九 六箇度合戦の事
（平中納言教盛の）子息たちは、伊予の河野四郎が召せども参らぬを攻めんとて、四国へぞ渡られける。兄越前三位通盛の卿は、阿波国花園の城にぞ着き給ふ。弟能登守教経は、讃岐の屋島に着き給ふし聞えしかば、伊予国の住人、河野四郎通信は、安芸国の住人沼田次郎は母方の伯父なりければ、一つにならんとて、安芸の国へおし渡る。能登殿、この由を聞き給ひて、屋島を立て追はれけるが、その日は備後国鞆島と云ふ所に着きて、次の日沼田の城へぞ寄せられける。沼田次郎・河野四郎一つになつて城郭を構へて待つ処に、能登殿やがておし寄せて、散々に攻め給へば沼田次郎はじとや思ひけん、甲を脱ぎ弓の弦を外いて降人に参る。河野は猶も従はず。その勢五百余騎ありけるが、五十騎ばかりに討ちなされ、城を落ちて行く処に、ここに能登殿の侍に、平八兵衛為員と云ふ者、二百余騎ばかりが中に取りこめられ、主従七騎に討ちなされ、助船に乗らんとて、細道にかかつて汀の方へ落ち行くところを、平八兵衛が子息、讃岐七郎義範、究竟の弓の上手なりければ、追つかかり、よつ引いて、七騎を五騎射落す。主従二騎にぞなりける。河野が身に代へて思いける郎等に、讃岐七郎おし並べて、むずと組んでどうと落ち、取つて押へて首を掻かんとする所に、河野四郎取つて返し、我が郎等の上なる讃岐七郎が首かき切つて深田へ投げ入れ。大音声を立て、伊予国の住人、河野四郎越智通信、生年廿一、軍をばかうこそすれ。我と思はん人々は、寄つて留めよ」と名のり捨て、郎等を肩に引つけ、そこをばなつて逃げ延び、伊予国へおし渡る。能登殿、河野をば討ち漏されたりけれども、沼田次郎が降人たるを召し具して、一ノ谷へぞ参られける。



『前賢故実』八卷上(愛媛県立図書館蔵)

建保3(1215)年、河野通信より池内冠者(池内公通)へあてた所領譲渡状

「東はいさ、南はあわい(粟井)さかい、西は大たう、北はかわら(川原)を限る」風早郡内に散在する田畠領地を息子とされる公通に譲ることを記しています。河野氏関係の文書では最古で通信直筆の書ともいわれます。(松山市指定有形文化財)

江戸時代の菊池武保(1788~1878)が描いた苦戦する通信『平家物語』や河野氏の家譜などを参考に描かれたと考えられます。平教経の厳しい攻撃に対して、通信は備後に渡り沼田氏とともに奮闘しましたが、最後は味方一騎となり苦戦する場面のようなようです。



『池之内文書』河野通信所領譲渡状(個人蔵)

